田所遺跡（たどころ）

調査の経過

一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曽川町黒田にまたがる田所遺跡は、木曽川によって形成された自然堤防上および後背湿地に位置している。現況は標高10ｍ前後の水田及び畑地である。

今回、東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査を、日本道路公団及び愛知県土木部から愛知県教育委員会をとおした委託により実施した。東海北陸自動車道の建設予定地内には既設の農道が存在するためＡ～Ｈの調査区を設定して調査を行った。調査面積は7150㎡、調査はＡ～Ｄ区を７月から11月、Ｅ～Ｈ区を11月から翌年３月にかけて実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、耕作土の下に黄褐色シルト層（江戸期包含層）、その下に天正地震の噴砂に起因する砂層を噛み、さらに暗褐色シルト層（中世包含層）が存在する。この暗褐色シルト層下面が中世および平安時代の遺構検出面にあたる。さらにその下は２層の褐色シルト層（奈良期包含層・無遺物層）を経て古墳時代の水田土壌（灰褐色シルト層）に至る。

検出された遺構と遺物は、Ⅰ：弥生時代中期　Ⅱ：古墳時代　Ⅲ：奈良時代　Ⅳ：平安時代　Ⅴ：中世と５期に分けて考えることができる。特に注目すべきことは、①Ａ区の平安時代の住居跡群の土坑から「富壽神寶」が出土したこと、②幅８～10ｍの南北方向に走る中世の大溝がＣ区・Ｄ区を貫き、しかもＥ区とＨ区で東西方向に屈曲し旧集落を囲むと推測されること、③Ｇ区で墳墓堂、Ａ区・Ｄ区で古墳時代の水田跡が検出されたことである。

（太田芳巳）

Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｈ区

遺構　Ⅰ期に関しては、明瞭な遺構は確認することはできなかった。

Ⅱ期の遺構としては水田跡がある。水田跡はＡ区よりＤ区にかけて検出され、調査区周辺に広範囲にわたって展開している可能性が考えられる。いずれも畦畔によって明確に区画されており、一区画は、東西３～４ｍ・南北５～７ｍと小規模であり、やや南北方向に細長く延びる長方形状および不定形の平面形態を呈している。耕作土等から出土した遺物より、古墳時代後期を中心とした水田跡と考えられよう。また、畦畔上に掘削された土坑（ＳＫ114）より石製有孔円板が出土しており、水田との関連が注目される。

Ⅲ期の遺跡は、Ａ区において奈良末期に属すると考えられる竪穴住居を15軒確認した。多くが重複して検出されており、また、出土遺物も少なく不明な部分が多いが、いずれも

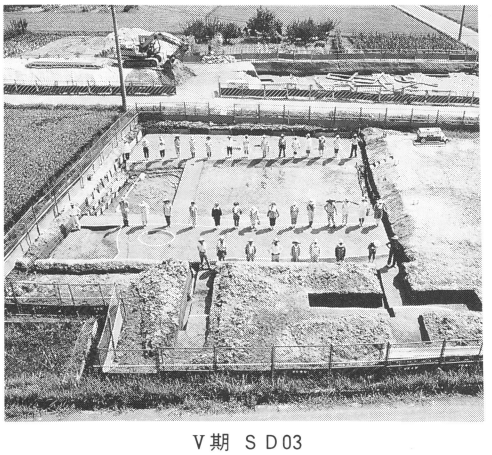
第Ｉ図　調査区位置図とＳＤ03推定図（Ｉ：5000）

一辺５ｍ前後の方形プランを呈するものである。

Ⅳ期は、今回の調査中最も遺構の残存状況が良好であり、竪穴住居をはじめとした数多くの遺構・遺物を確認することができた。竪穴住居は重複する形で14軒検出され、時期的には出土した灰釉陶器の年代観より、黒笹90号窯～折戸53号窯式に比定されると考えられる。いずれも一辺が５～６ｍ程度の規模であり、方形状のプランを呈する。住居の内部構造に関しては判然としない部分もあるが、壁面近辺で石・焼土・土師器甕がセットとなる「かまど」状の遺構が認められる住居を４棟確認することができた。また、竪穴住居の周辺には土坑・柱穴群が点在しており、ＳＫ03からは黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器とともに残存状況は不良であるが皇朝十二銭の一つ「富壽神寶」が３枚出土した。

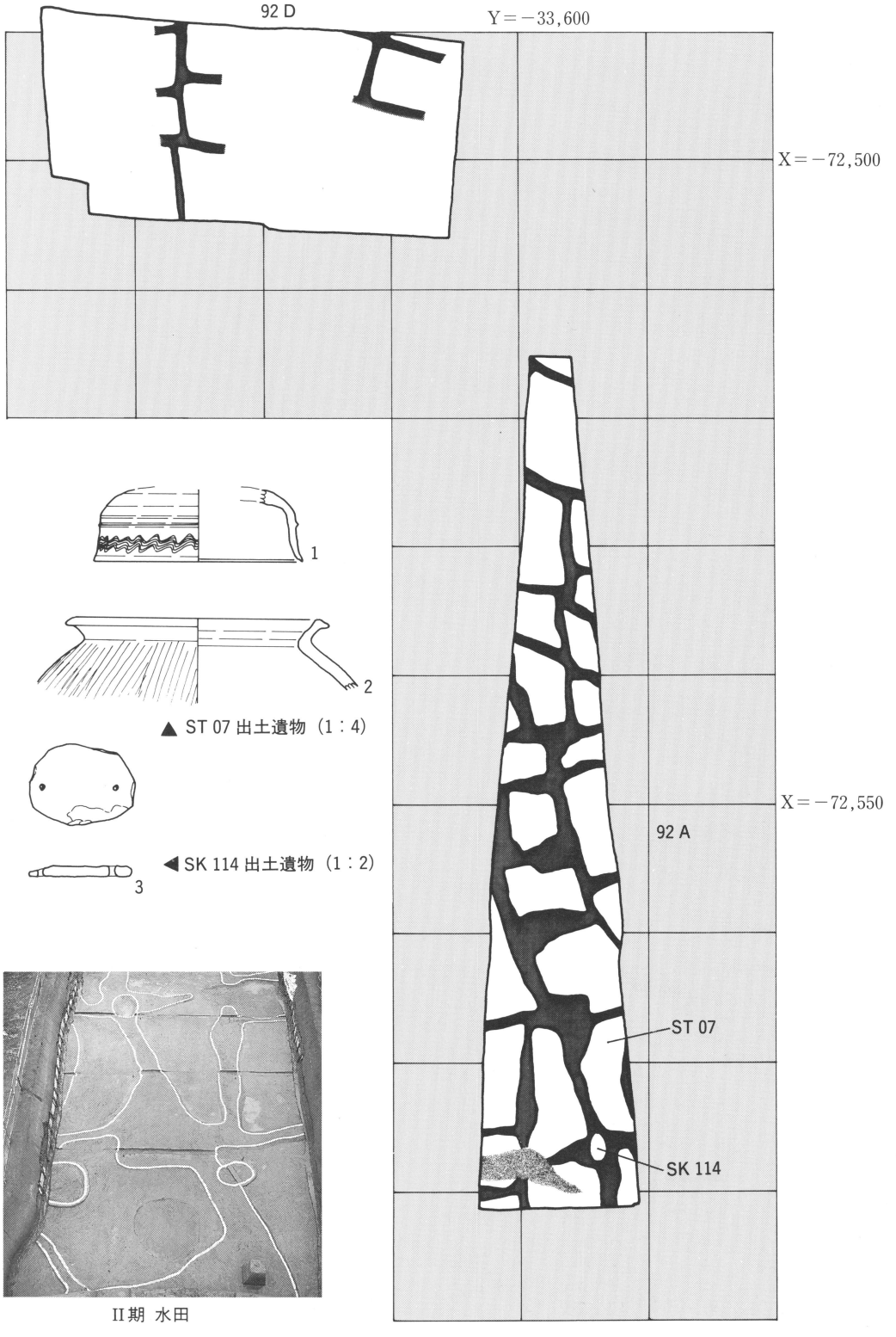
Ⅴ期の遺構として注目されるのは、幅８～10ｍを測るＳＤ03の存在であり、Ｅ区およびＨ区の状況より、400ｍ四方にわたって展開し、中世期の田所集落を取り囲む可能性が考えられる。

遺物　図示したのはＳＢ12およびＳＫ03出土資料であり、前者からは折戸53号窯式に並行する一括資料が、後者からは黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器とともに「富壽神寶」が出土している。「富壽神寶」は、「和銅開珎」より数え５番目に鋳造された皇朝銭であり、818年より834年にかけて10万貫文（１億枚）が発行されたとされる。愛知県内においては、かつて渥美郡渥美町貝の浜貝塚において１例採集された報告があり、田所遺跡出土例は２例目のものとなる。しかし、田所遺跡出土例は、発掘調査による出土品であり、黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器と共伴している点が重要である。貨幣は鋳造→流通→廃棄までにある程度の時間差を考慮せねばならないものの、共伴遺物の絶対年代を推定する物差しとしての役割を果たすものである。今回、田所遺跡より出土した「富壽神寶」は、灰釉陶器の年代観を考える上で貴重な手がかりを与えてくれるものといえよう。　（服部信博）

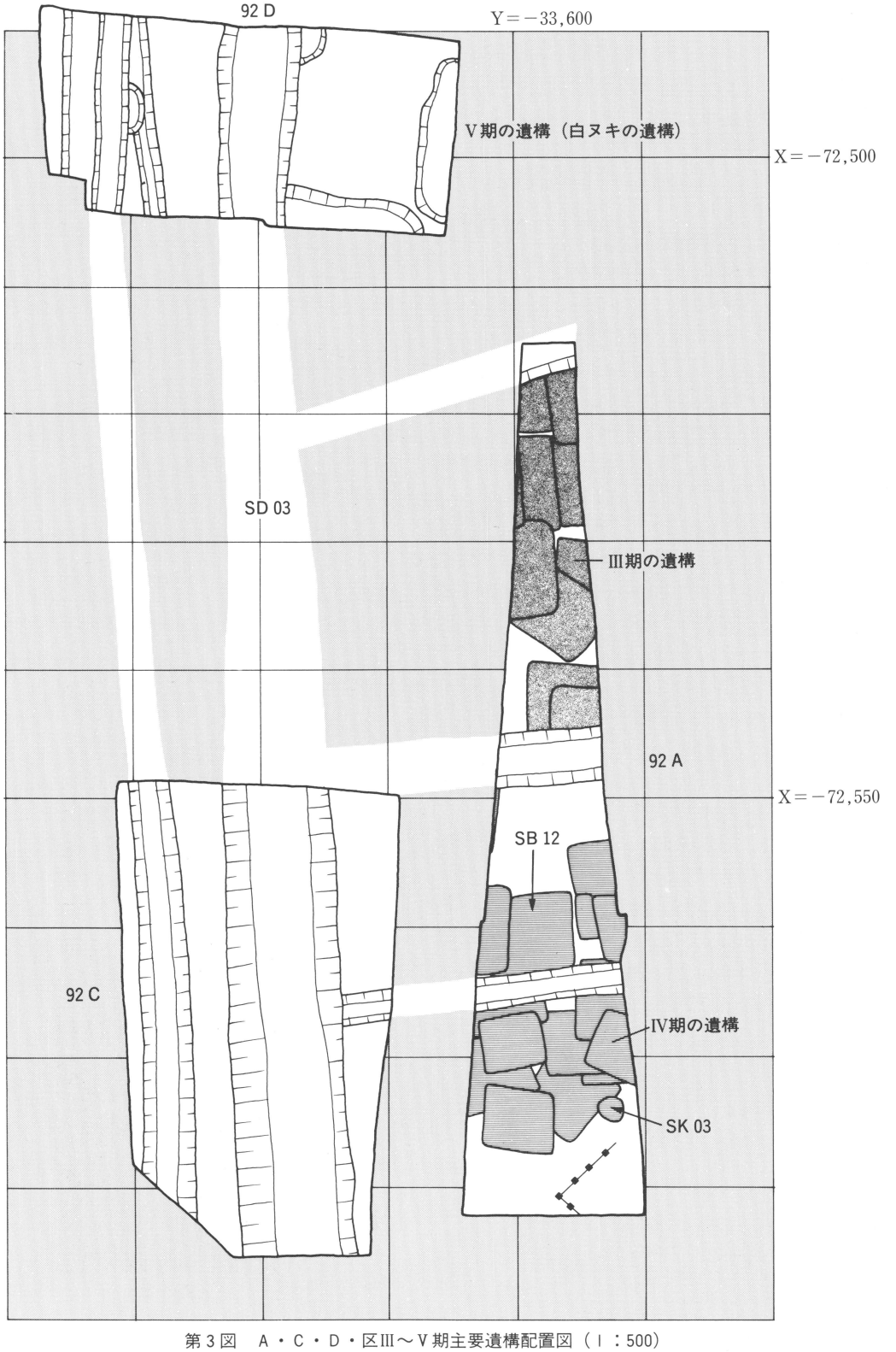


Ⅴ期　ＳＤ03

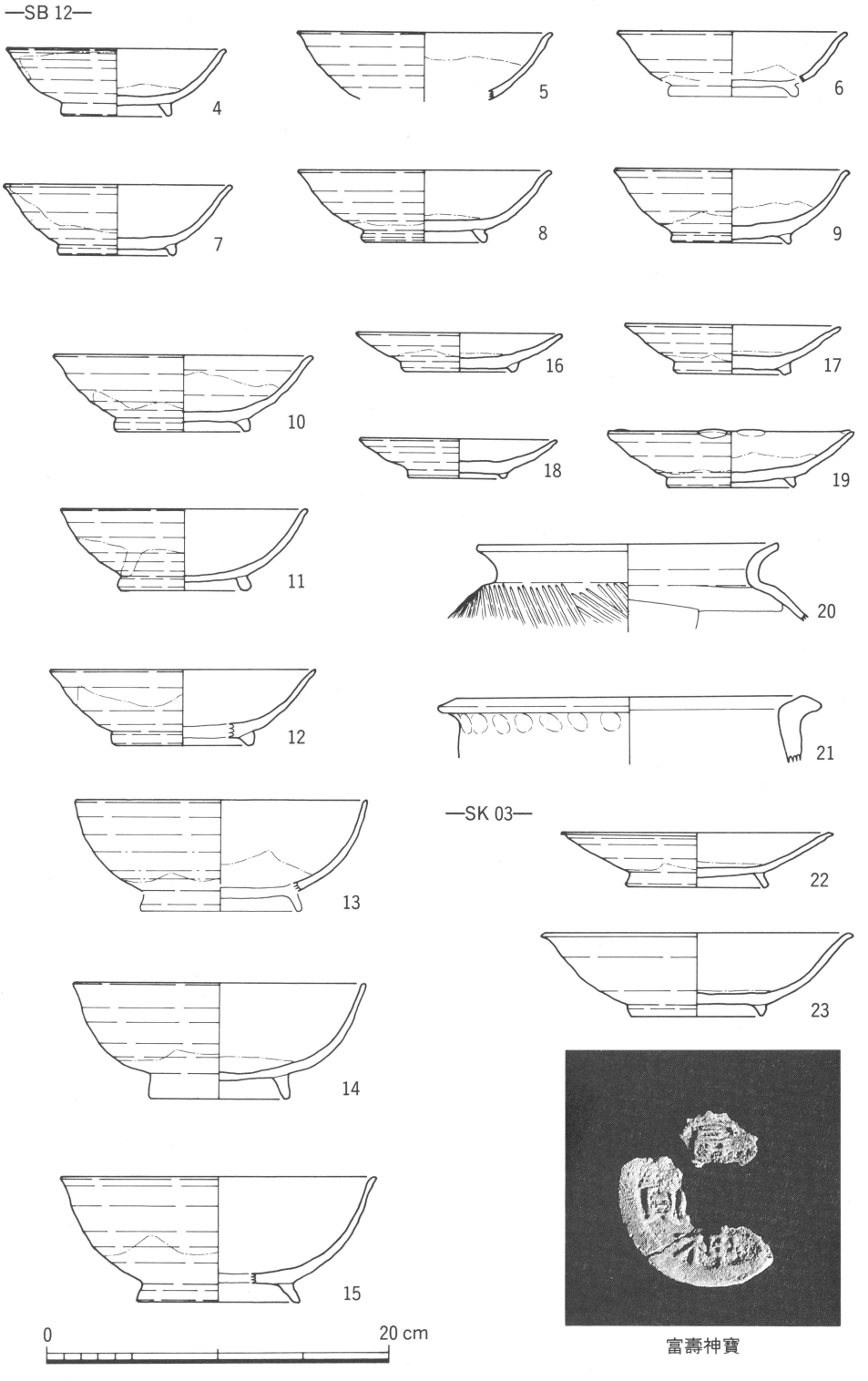
Ⅵ期　竪穴住居群



第２図　Ａ・Ｄ区II期主要遺構配置図（Ｉ：500）



第３図　A・C・D・区III～V期主要遺構配置図（Ｉ：500）



第 4 図　Ⅳ期出土遺物（1：4）

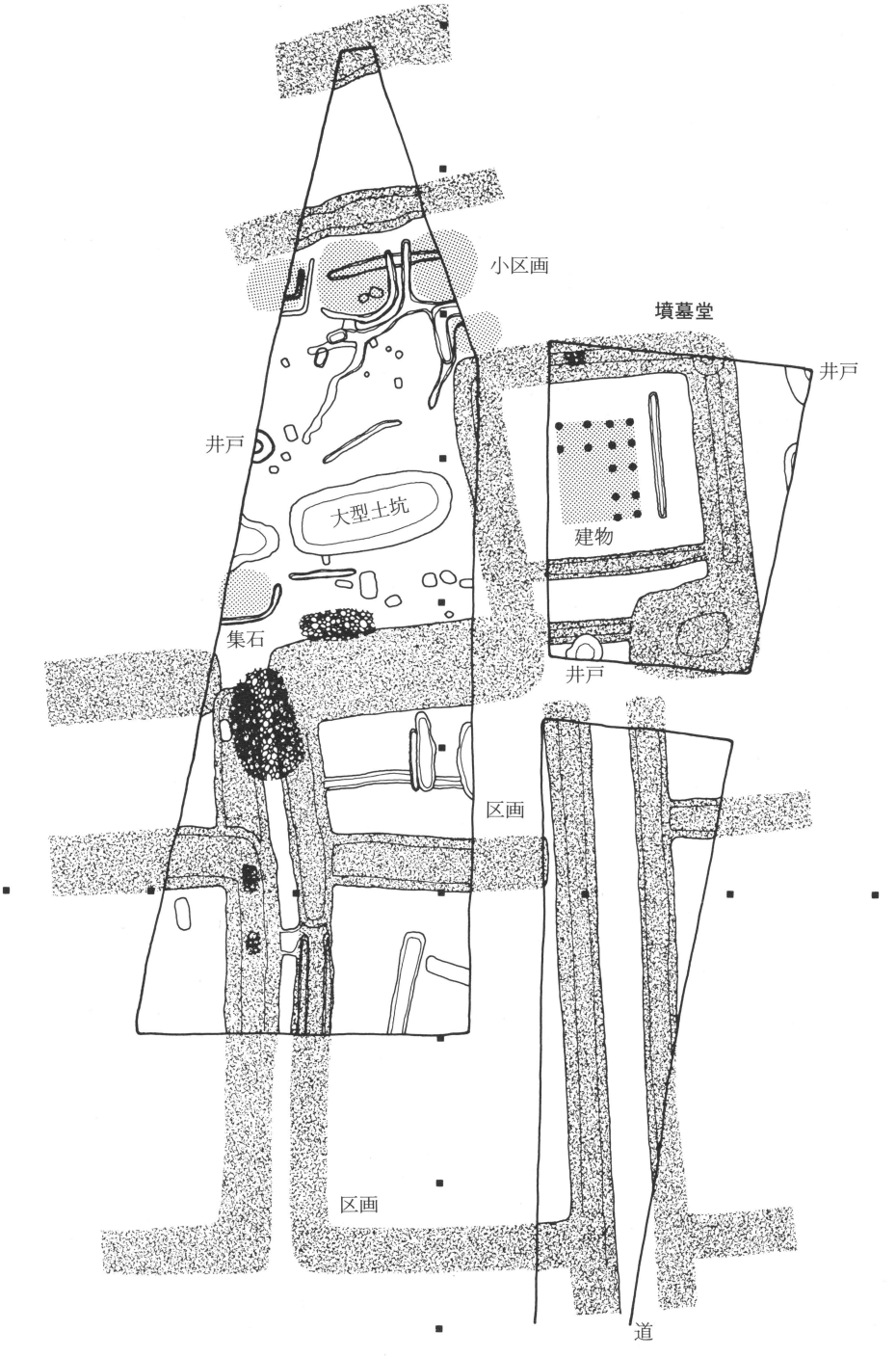
E・F・G区

F・G区は本年度調査地点としては最も北に位置する調査区である。周辺の現状は水田地帯であるが、表土を除去するとただちに黒色土となり、その下部には砂層が堆積する。ところがF・G区の南に位置するE区では、シルト層が数層にわたって堆積し、2層以上の水田面が確認できている。したがって遺跡立地においてはE区から徐々に北に向かって微高地状の高まり（木曽川左岸の自然堤防）が展開していくことが確認できる。

さてF・G区では黒色土上位で溝及び土坑群が検出され、遺構内からは13世紀～14世紀にかけての遺物が出土している。これらの遺構群は幅5mほどの溝によって20m前後の方形区画群を形成するようである。その内の最も注目される地点は、G区北側に存在するSD26・27・28（溝幅約6mで深さ0.8m）によって構成された区画である。平坦部の幅が東西約13m、南北15mを測り、溝で囲まれた内部には総柱の掘立柱建物1棟が存在する。南側には入口部と考えられる開口部が存在し、その西側には井戸が築かれている。中央部に存在する建物は、東西3間（約5m）、南北4間（約6.5m）で一部には柱根が残存していた。周囲の溝からは灰釉系（東濃系）陶器・伊勢型鍋・土師皿に混じって四耳壺・水注片等が出土している。14世紀に所属する資料が多いが、12世紀代まで遡る資料も散見できる。これら溝・建物等によって組合わされた遺構群は、出土遺物から墓に関係する施設と考えることができ、「墳墓堂」と推定できよう。するとF・G区周辺は墳墓堂を中心に方形区画が周囲に広く展開し、中世期の墓域を構成していたことになる。　（赤塚次郎）

墳墓堂と墓域

墳墓堂全景



第５図　Ｆ・Ｇ区Ⅴ期遺構配置図（Ｉ：500）

自然科学分析

ここでは今年度田所遺跡で見られた自然科学的特徴について、噴砂・堆積・生物遺体の順に述べる。

噴砂　田所遺跡ではどの調査区でも少なからず噴砂を確認することができた。

A区、C区、D区で見られる噴砂の特徴として、第6図や写真Aのように噴砂を起こした砂層とその上位の粘土またはシルト層との境界（層理面）は不連続で、凸凹が見られる点があげられる。また、噴砂層の上に堆積する粘土層がブロック状に砂層中に取り込まれている。この事実は噴砂とそれに伴う液状化によるものと考えられる。また、一部で噴砂が粘土層を貫いているのも確認された。

Ａｂ区最下面では、古墳時代の水田の畦畔を貫いて細粒～中粒砂からなる噴砂が厚さ約10cmで覆っていた。

H区では幅数mm～１cm、最大２cmで直線状の噴砂が多数確認された。それらはおおよそN20°～30°WとN20°～60°Eの２方向を示す。また、ＳＤ40を埋積した砂を供給源として、噴砂が上位の粘土層を貫いているのも見られる。噴砂に伴う砂の淘汰作用も確認でき、下位で中粒砂、上位に向かい細粒～極細粒砂に漸移している様子が観察された。

堆積　C区、D区において幅約８ｍの溝が南北方向に１条確認された。ともに細粒～中粒の砂によって埋積されており、シルトや粘土の挟みは見られない。また、砂層中には葉理が発達しており、それより得られる古流向は北から南への流れを示している。

Ｇｂ区では、南北方向の溝１条が確認され、細粒から中粒の砂によって埋積されていた。ここでも葉理の発達は良好であり、古流向は北から南を示す。

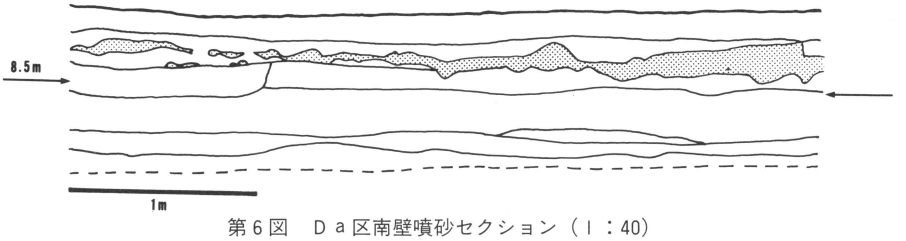
H区では東西方向に幅約15ｍの溝（ＳＤ03の延長）が１条確認された。溝の方向はN65°Eである。細粒砂によって埋積され、トラフ型斜交層理が見られる。斜交層理は約10cmの厚さをもって１セットをなす。層理面には植物片が含まれるときもある。層理内にはフォアセット葉理が顕著に発達し、厚さ１mm程度の赤褐色を呈する砂鉄層によって識別される（写真B）。フォアセット葉理は直線的であり、傾斜角はおよそ20°で一定している。また、底置層に鋭角的に接している。フォアセットの上部と基部とで堆積物の粒度にほとんど変化はなく、１つのフォアセット内で堆積物の粒度の級化構造は認められない。なお、砂層内にはシルトや粘土の挟みは見られない。フォアセット葉理からは古流向が得られ、東から西ないしは北東から南東への流れが推定される。

昆虫遺体と植物遺体　Ｇｂ区において、ＳＤ26およびＳＤ27を埋積する細粒～中粒砂混じりの黒色粘土層より、大量の昆虫遺体と若干の植物遺体を採集した。

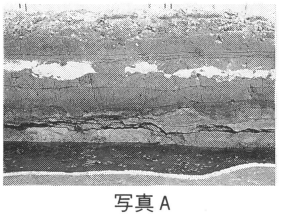
昆虫遺体は甲虫類の翅鞘および前胸背板が採集でき、中でも緑色を呈し、光沢を有する

翅鞘がその大半を占める。また、植物遺体としてはモモに類似した種子が数十点産出している。昆虫および植物遺体とも詳細な分析をまだ行なっておらず、今後の課題である。

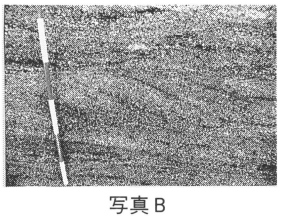
なお、Ｇｂ区のＳＤ26、ＳＤ27からは昆虫および植物遺体とともに、Ⅴ期に比定される砥石や土器等の遺物も出土している。生物遺体と遺物とが同時に産出しているのはＳＤ26、ＳＤ27のみであり、両者の関連性が興味深い。　（鬼頭　剛）



第６図　Ｄａ区南壁噴砂セクション（Ｉ：40）



写真Ａ



写真Ｂ

まとめ

今回の調査によって下記の成果が得られた。

１．Ｆ・Ｇ区では鎌倉時代を中心とする「墳墓堂」と方形区画を構成する墓域を確認することができ、中世期の墓制を考える上で重要な資料を提示できた。特に墳墓堂は東海地域初例であり、全国的にも栃木県下古館遺跡等類例がとぼしく、大変貴重な発見となった。

２．Ａ区では平安時代の竪穴住居が14棟検出され、黒笹90号窯式～折戸53号窯式にかけてのまとまった資料を得ることができた。特に９世紀後半を中心とする遺構が多く、その中にはＳＫ03のような「富壽神寶」を伴なうものも認められた。なお当地区は葉栗郡大毛郷推定地に位置するところからこれらとの関係が今後の課題であろう。

３．Ｃ・Ｄ・Ｈ区では鎌倉時代を中心とする大溝・土坑・柱穴等が見つかり、特に幅８～10ｍの大溝はＥ区南端からＣ・Ｄ区、さらにＨ区にかけてほぼ南北に掘削されている可能性が高く、今後の調査によっては田所集落を囲むような中世期の環濠を想定することができる。なお、Ａ・Ｄ区周辺では下層より古墳時代中期から後期にかけての水田跡も確認されている。　（赤塚次郎）